

腐乱、再生

おんな、と言っではならぬ
ある種族、になっている

おとこ、と言うものは無い
ある種族、に過ぎない

プラスチックな
あるいは、メタリックな殻

その内側でゲル化し
濁った液体へと崩れてゆくもの

意識までもが混濁し
個体という区別は曖昧模糊となる

累々と、という表現は有り得ない
合流し、分流するのみ

それは死によって齎されることはない
ゆっくりとした生命の崩壊過程である

それらをカモフラージュするため
殻に塗られた甘い芳香のする塗料

我々は幻惑され、それを剥ぎ取り合い
薄い膜同士を接触させることを希う

発光するLEDは、ほくそ笑む
自ら進化を探る必要はない、と

錯乱の中で流れる画面

培養、という救世主に縋る

事象のひとつひとつは問題とされず

その集合体のみが扱われる

感覚というものの選択性を最大限に利用し

五感より優れたものとして称揚される

あらゆるものを委託する

生そのものさえも

腐乱からの再生に目をそむける

その蛍光は信仰を許さない

死は恐怖の対象ですらなく

存在そのものを隠蔽されつつある

やがて殻そのものも有機化し

新たな種族として分類される

生命抜きに知的存在として

概念と変わらぬものとして

(2013.6.15)